冷たい手

雨が雪に変わるのに時間はかからなかった。
「降って来やがったな…」
魎呼は、どんよりとした雲に覆われた、灰色とも紺色とも群青色とも思える夜空に目を細めた。
（なにしてんだろ、あたしは）
立ち止まり、空を見上げながら魎呼は思った。雪がチラチラと降っては、魎呼の肩や髪に触れてはすぐに溶けて行った。
図書館に行って来ると天地が家を出たのは、午後のお茶が終わってからだった。一緒に行きたいと天地の服を掴む魎皇鬼に、天地はすぐ帰るよと笑顔で言い、魎皇鬼の頭を撫でると出掛けてしまった。しかし、天地は帰って来なかった。何の用事も無かったが、天地が家に居ないと、妙に心がスカスカする。まるで隙間風が心をすり抜けて行くようだ。魎呼は空中温泉に浸かりながら、暮れて行く空を眺めていた。今日は一日天気が悪い。天地が出掛けた時分はまだ曇っている程度だったが、どうやら雨になりそうだった。天地様が帰って来ないと、家では阿重霞も心配しているのだろうと、魎呼はぼんやりと温泉の天窓を見つめていたが、不意に天地の優しい笑顔が恋しくなって、風呂から上がると天地を探しに、家を出た。
「もう入れ違いになってるかもな…」
魎呼は再び歩き出した。街の喧騒。家族、恋人、友人と一緒に歩く人々。寒くは無いのに、自然と魎呼はコートの襟を立て、かきあわせた。慣れている街なのに、酷く心細いのは何故だろう。こんなことをしていないで、家で待っていれば良かった。或いは、空から飛んで探せばよかったとも思った。けれど、天地がそれは嫌がるだろう。家で待っていても、天地の笑顔に一番最初にはありつけないだろう。天地はきっと、一番に魎皇鬼のところへ行ってやるのだ。或いは砂沙美のところへ。それから阿重霞にただいまと言って、その間に美星や鷲羽が天地に声を掛け、自分にただいまと言ってくれるのは、最後の気がする。尤も、自分から天地に飛びつけば別だが…と魎呼は思った。天地は抱きつくと困った顔をする。困った様な、照れている様な…。魎呼はその顔を思い出し、ふっと知らずのうちに微笑んだ。天地の顔は可愛い。天地に会いたい。
図書館の場所は、うる覚えだった。魎皇鬼が先日、鷲羽と行ったので、その記憶を共有することにした。けれど、あの日の自分の記憶は、魎皇鬼は勿論、鷲羽とだって共有したくは無い。天地の隣で、熱心に本を読む天地の横顔を眺めたあの日。天地が読書するのを止めると言って、本を閉じた時には酷くガッカリしたあの日。天地の思い出の絵本を二人で読んで、天地がまた本を読み始めた時、手を繋いで貰った夜。あの日、いつの間にか魎呼は天地の隣で寝てしまった。寝てしまった魎呼を気遣って、天地は立たずにそのままで居てくれて、結局朝まで二人は肩を並べて互いに寄り添って眠った。起き

た時、体中が凝り固まった様だと天地は苦笑していた。
　気温が下がっているのだろうか、息が白くなる。魎呼は思わず、自分の手に息を吹きかけた。いつの日だったか、魎呼の手はいつも冷たいと天地は心配してくれた。魎呼自身、身体が冷えても大したことは無いと思っていたし、手が冷たいのも気にならなかった。けれど、天地が気にしてくれるので、つい自分でも、自分の手に息を吹きかけて擦ってみたりするようになった。
　魎呼がそうしていると、若い数人の男が魎呼をジロジロ見ている視線を感じた。そのうちの一人が魎呼に声を掛けてくる。
「お姉さん、寒そうだね。どっか入って俺達とお茶しない？」
魎呼は男を一瞥した。ニヤニヤと締りのない顔は、いかにも下心が見え見えだった。
「良いよ、あたしは忙しいんだ」
「そう言わないでさぁ」
男が魎呼の肩に手を掛け引き寄せた。ね、っと顔を近づけてくる。魎呼は一瞬、男を殴り飛ばしてやろうかと思ったが、こんな所で騒ぎを起こしては、帰宅してから天地にこっぴどく叱られるのは目に見えていた。
「悪いけど、急いでんだ。声掛けるなら他あたってくんな」
魎呼はそう言うと、金色の瞳を光らせ、ギロリと男を睨んだ。魎呼の異様な眼力に、男はたじろぎ、怯え後退った。
「わ、悪かった…ごめん…」
男はワナワナと口を震わせ、仲間達が不思議がる中、他を探そうと言うなり、その場から立ち去った。
「あーあ。全く根性の無い奴ら。無駄な時間過ごしちまったぜ」
魎呼は口に出して呟くと、辺りを見渡した。
（そっか、女ひとりで歩いているのは、あたしぐらいなんだな…）
若い男女が手を繋ぎ、何かを囁き合って愉しそうに通りすぎる。魎呼は過ぎ去って行く彼らを見つめると、自分の手のひらをじっと見た。天地は何処に居るのだろう。このまま見つからない気がする。この手はもう温めて貰えない様な気がする。切なくなった魎呼は、開いていた手のひらをグッと握り、拳を作った。
（そんな事はない。天地はもう家に帰って、砂沙美の晩飯の仕度を手伝っているかもしれないしな…）
　魎呼はもう帰ろうと思った。あても無く、ブラブラと図書館まで行くよりは、もう帰った方が良い気がしてきた。そうして踵を返そうと思ったが、足は動かない。諦めの悪い自分を呪い始めた時…ふと見上げると、傘を差し、横断歩道の信号待ちをしている天地の姿がそこにあった。天地！と、駆け出して行きたかったが、魎呼はそれを堪え、敢えて冷静に天地の方へと歩き出した。
「雪になったな…」

声を掛けると、天地は非常に驚いた顔で魎呼を見た。予想以上の反応で、魎呼は心の中でニヤリと笑った。
「どうしたんだよ？」
「だって、お前、なかなか帰って来ないんだもの」
「…迎えに来てくれたのか？」
「ま、そんなトコだよ」
　信号機が点滅し、横断歩道の信号が青になる。二人は肩を並べて歩いた。雪は先刻よりも降っていた。肩が濡れるぞと天地が言ってくれた時、魎呼は来て良かったと思った。愛しい横顔。恋しい声。
「傘、どうしたんだよ？お前、家を出る時には持っていなかったろう？」
「ああ、図書館出たら降って来ちまったから、コンビニで買ったんだよ」
「ふーん」
嬉しさを押さえながら、魎呼はさりげなく、天地の腕に自分の手を絡めた。天地は困った様な顔で魎呼を見たが、特に何も言わなかった。
「図書館っての、混んでたのか？」
バス停までの道々、魎呼が天地に尋ねた。街はまだ賑わっていたが、魎呼の耳には天地の声以外の音は入ってこなかった。
「混んでたというかさ、面白い本見付けて、つい読んでたら遅くなった。すぐに借りて帰ってくれば良かったんだよな。魎皇鬼や砂沙美ちゃん、心配してるだろうな…」
やっぱり、と魎呼は思った。天地の頭には、すぐにあいつらの顔が浮かぶ。魎呼が黙っていると、天地が魎呼の顔を覗きこみ、からかう様な口調で
「まさかお前が歩いて迎えに来るとは思わなかったけどな」
「何だよ、あたしが歩いていたら変なのかよ？」
「ううん、ちょっと面白いなって…。魎呼もさ、随分、此処の生活に馴染んだよな」
「お前が怒るからだろう？」
　魎呼は少し腹が立った。切なくて会いに来たのに、当の天地は暢気に本を読んでいた事が魎呼には気に入らなかった。
「怒ったのか？」
魎呼が何も言わないので、天地が尋ねて来る。怒ってないと魎呼は言ったが、あからさまに声に怒気が含まれていた。
「来てくれたのに、悪かったよ…。何で来てくれたんだ？探して来いって言われたのか？」
天地は優しく訊いて来た。会いたかったから。どうしてもお前の顔が見たかったからとは、口が裂けても言えない。少しだけ考えて魎呼は言った。
「手が…冷たいんだ…」
「え？」

魎呼の返事に天地は思わず魎呼の顔を見つめた。瞬間、傘の中で天地と見つめ合った。
「手が冷えちまったんだよ」
「……それで、」
「あっためてくれよ」
天地の腕に絡めていた手を抜きとると、魎呼は天地に手を差しだした。天地は少し驚いた様子だったが、魎呼に傘を持たせると、片手づつ魎呼の手に息を吹きかけ、擦ってやった。
「温かいか？」
擦りながら天地が訊いてきたので、魎呼は素直にうんと頷いた。
「俺じゃ無くても、鷲羽ちゃんでも魎皇鬼にでも温めて貰えば良いのに」
案の定、天地はそう言ったが、魎呼は自分の手を擦る天地の顔を見ると、
「それじゃあ意味が無いんだよ」
と返事をした。不思議そうに魎呼の顔を見ながら、意味？と天地が訊き返したが、魎呼は
「天地だって、嬉しいだろう。あたしの手に触れられてさ」
と、微笑んでみせた。天地はまだ納得のいっていない顔をしたが、苦笑すると傘を魎呼から受け取り、もう帰らなきゃなと呟いた。
「温かいよな、天地の手」
「誰だって温かいよ。魎呼の手ほど冷たい手は、俺知らないよ」
「そうかい？ふふ」
「何だよ？」
「ううん。何でも無いよ。さっ帰ろうぜ。阿重霞の奴も、ろくろっ首になって、お前の事待ってるぞ、きっと」
魎呼はまた天地の腕に自分の腕を絡ますと、嬉しそうに笑った。冷たい手…。魎呼にとってはその方が良かった。こうして、天地に温めてもらえる。
（誰かの…じゃなくて、温かい天地の手が良いんだよな…）
ぎゅっと天地の腕に絡ませた手に力を込める。
「何だか良く分かんないけど、変な奴だな、魎呼は」
「良いじゃねぇかよ、何でも」
呆れる天地に、魎呼は笑いかけた。まあいいかと天地は言い、二人は雪降る街を後にしたのだった。